

沖縄県石垣島における完新世の植生変遷 ～名蔵アンパル湿原について～

藤木利之・林 在珠・中野智之・小澤智生 (名古屋大学大学院環境学研究科)

石垣島名蔵アンパル湿原上流の水田において、シンウォールサンプラーで、沖積層の基盤礫岩に達する 84.5mの堆積物コアを採取した。本堆積物は 19.60mまでが完新世であった。今回は 19.60mまでの花粉分析結果を報告する。

9000年前にはすでにシイ属を優占種とする照葉樹林が成立していたようである。草本類の花粉が全くと言ってよいほど検出されなかったため、石垣島はつい最近までイタジイを主とする亜熱帯の原生林に覆われていたと思われる。最上部でマツ属・イネ科・カヤツリグサ科の花粉が急増するが、マングローブ林を破壊し、護岸工事や土地改良などを行い、稲作を始めたとみられる。しかし、常緑広葉樹の花粉の急激な減少は見られないので、広大な森林の破壊までは及んでいなかったと思われる。

マングローブ林も約9000年前にはすでに成立し、ずっと広大な林を維持してきたと考えられる。約5000年前からヒルギ科の他にサガリバナやアダンの花粉が増加しており、現在のマングローブ林の構造から考えて、海面が徐々に低下した可能性がある。

